

奥山半僧坊道案内資料Ⅱ

「豊田橋跡から赤松鳥居・気賀・笹形峠・奥山半僧坊へ」



～ 笹形峠 ～

○ 方広寺と奥山半僧坊

じんのうざん

深奥山方広萬寿禅寺（略して深奥山方広寺）は臨済宗方広寺派の大本山で、後醍醐天皇の皇子、無文元選禅師が井伊氏の一族奥山六郎次郎朝藤の招きを受けて、建徳2年（1371）に開創した。本尊は釈迦牟尼仏、脇侍は文殊菩薩・普賢菩薩で観応3年（1352）の作。共に国指定重要文化財。境内の各所には五百羅漢の石像が安置されている。

奥山半僧坊は、奥山半僧坊大権現と呼ばれ、方広寺の鎮守である。半僧坊真殿に祀られている。

伝説によると、無文元選禅師が中国より帰国の時、海で暴風にあったが、鼻の高い一人の異人が現れ、船を無事博多の港に導いた。そして禅師が方広寺を開いた時、再び現れ、この山の鎮守とならんといい、半ば僧に似ているところから半僧坊と名乗り姿を消した。以来方広寺を護る鎮守として祀られたという。

江戸時代の半僧坊信仰はふるわなかった。方広寺は、幾度か火災にあったが、明治14年の大火で、半僧坊は類焼を免れたところから、たちまちすぐれた靈験をもつものと、信仰を広く集めるようになった。

厄難消滅・海上安全・火災消除・諸願満足の御利益があるという。

○ 半僧坊道

半僧坊道は遠州を代表する信仰の道である。天竜川以西の半僧坊へのルートは、浜松中央から三方原、金指へのルート、豊田橋から笠井・小松（あるいは西ヶ崎）・三方原・金指（気賀）へのルート、安間（あるいは池田橋）から市野・三方原・金指へのルート、宮口から都田・金指ルート、浜名湖東岸や北岸のルート等、いくつもある。また、時代により道筋は変化している。

明治16年に天竜川の池田橋や豊田橋が開通したことと合わせて、引佐・亀玉郡長であった松島吉平（十湖）が、明治17年、諸国からの半僧坊への参詣者の便を図るために、音頭取りとなって、方広寺から浜松・本坂・市野・笠井・宮口、渋川等へ通じる道路へ町石を建立したと記録がある。明治十年代後半には多くの町石や道標が建てられた。

本案内資料は、豊田橋跡から笠井・西ヶ崎・赤松鳥居・気賀・笹形峠・半僧坊へのルートについて、案内する。

豊田橋のたもとにあった町石によると、半僧坊までの道のりは、

六里拾丁三十五間 （約24.7km）

である。

○ 半僧坊道の復元について

本資料の半僧坊道の道筋は、明治十年代後半から二十年代初め頃の道筋を、大日本帝国陸地測量部が明治23年に測量した二万分の一の地図をもとにし、さらに地元の人のお話も参考にして、現在の地図上に復元した。現在の地図は、国土地理院の「電子国土ポータル」を活用した。不正確な部分もあると思われるが、今後修正をしたい。

○ 参考文献

- | | |
|----------------------------|------------------|
| ・浜松の石造文化財 | 浜松市石造文化財調査会 |
| ・秋葉街道 | 静岡県教育委員会 |
| ・遠江の道しるべ | 静岡新聞 昭和52・53年 |
| ・ふるさとよもやま話 | 細江町農業協同組合 |
| ・浜松市石造文化財所在目録 | 浜松市石造文化財調査会 |
| ・半僧坊道の野仏と道しるべ | 東海展望1975年1月～9月号 |
| ・はままつ・笠井の昔話 | 東海展望 |
| ・天竜川「豊田橋」架橋顛末記 | 東海展望1974年9月～12月号 |
| ・遠州の寺社・霊場 | 神谷昌志・酢山隆 静岡新聞社 |
| ・遠州歴史散歩 | 神谷昌志 静岡新聞社 |
| ・わが町文化誌「笠井」 | 笠井公民館 |
| ・研究紀要12-1号 | 静岡県立大学短期大学部 |
| ・東方見聞録 | 東区役所 |
| ・浜松の史跡 | 浜松市史跡調査顕彰会 |
| ・わが郷土 人・仕事・心 | 浜松市立笠井中学校 |
| ・浜松の史跡 続編 | 浜松市史跡調査顕彰会 |
| ・愛称標識ガイドマップ笠井地区 | 浜松市 |
| ・浜松歴史散歩 | 神谷昌志 静岡新聞社 |
| ・静岡県明治銅版画風景集 | 羽衣出版 |
| ・引佐の石仏 | 引佐町教育委員会 |
| ・引佐町民俗探訪記 | 引佐町民俗探訪記編集委員会 |
| ・奥山線の歴史展 | 浜松市立図書館 |
| ・愛称標識・続愛称標識 | 積志地区愛称標識設置委員会 |
| ・浜松の道・坂・橋～なまへの由来～ | 浜松市 |
| ・ふるさと歴史探歩 第一集 | 田辺寛司 |
| ・姫街道を歩く | 浜松市 |
| ・切り絵で伝える「姫街道の町」いにしへの町づくりの会 | |
| ・積志の歴史探訪1・2 | 小杉敬治 |

作成 平成25年8月11日 浜松市浜北区寺島816 太田隆雄
改訂 平成26年6月21日 TEL 053-587-3063



— 半僧坊道



2 半僧坊町石

かささぎ大橋の碑と並んで半僧坊への道のりを示す大きな町石が建てられている。正面に「奥山半僧坊 六里拾丁三十五間」、裏に「明治十七年六月建立」「末島村 川合貞一郎 (他12名の氏名)」と刻まれている。川合貞一郎は後の豊西村村長である。豊田橋開通直後の道標で、以前は豊田橋のたもとに建てられていた。



3 十湖百句塚と道標

百句塚は明治39年に笠井町福来寺に大木随處・松島十湖らによって建立され、その後、御殿山から法永寺に移転し、平成22年にこの地に移転築造された。芭蕉翁の句「ものいへば唇寒し秋の風」を中心に100

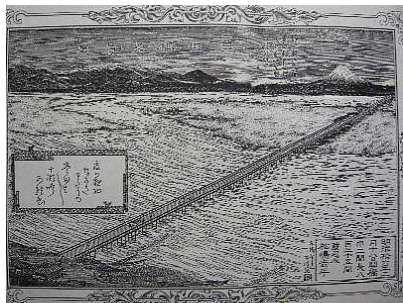
基以上の句碑が建てられている。

百句塚の入口横に、2つの道標が建てられている。もとは笠井上町より小松へ向かう半僧坊道の交差点にあったが、法永寺に移転後さらに百句塚と共にこの地に移された。1つは「左半僧坊道」「明治十五年八月建之」と刻まれ、もう一つは「直秋葉山 左平口 気賀 金指道」と刻まれている。



1 豊田橋跡

天竜川豊田橋は明治16年2月、豊田郡末嶋村（現浜松市豊西町）より豊田郡勾坂中村（現磐田市勾坂中）に架けられた有料橋で、長さ816間（約1470m）幅2間（3.6m）の木橋であった。松島吉平（十湖）などが架橋発起人となり「豊田社」を創立して経営した。交通上の便益は増し、地域発展に大いに役立ったが、6年後の明治22年の洪水により流失した。完全復旧はできず、いつしか昔の渡船に変わり、土地の渡し守により細々と戦前まで続けられた。



豊田橋「静岡県明治銅版画風景集」（羽衣出版）より



残された橋脚

豊田橋が開通後、十湖は「春風も吹渡也橋あらた」「夏の夜や長き渡りの豊田橋」と句を詠んでいる。

豊田橋流失から120年、平成9年にかささぎ大橋が開通した。

豊田橋跡より家並みの間を半僧坊道が通っている。



4 百人一句塚

百人一句塚は、御嶽神社境内に明治29年松島十湖が当時の俳人たちを勧誘して建てたものである。地元の人たちが多く、やや大きな一基には、芭蕉をはじめ、十湖の師匠である烏玉（有賀豊秋）、夷白（榎木要右衛門）などの句が刻まれている。芭蕉の句「ふる池や蛙とびこむ水のおと」がある。



5 十湖池

豊田川沿いの堤防の西にあった池で、約1ha程の広さがあった。慶応4年(1868)5月の暴風雨により天竜川堤防が切れ、その勢いでこの堤防も破堤した。濁流は水田のあった場所に底なしといわれるほど深い池を残した。地主であった松島十湖の名前から十湖池と呼ばれるようになった。昭和45年豊田川の改修で一部が埋め立てられたが、現在ビオトープ(生物空間)として再生させ地元の有志が活動している。



松島吉平(十湖)邸の銅版画には、撫松庵へ西に向かう半僧坊道の曲がり角に、半僧坊大鳥居が描かれている。

6 撫松庵跡と道標

豊西町上公会堂の所に、明治12年に松島十湖が建てた撫松庵があり、県会議員など政治家として活躍している中、閑詠自適の一時を過ごした。庵の前の築山に、芭蕉や俳諧の師であった夷白・嵐牛・鳥玉などの句碑を建てた。そして引佐鹿玉郡長を勤めていた明治17年に「志らぬ間にふえた白髪や秋の風」



の句を十湖第一号として建立している。中央の大きな「^{ちよくきせんぼ}陟岵瞻望碑」(親を懐かしみ仰ぎ見る)は明治25年亡母の忌日にあたり建てた。築山の西側にある道標は、「長上郡笠井鳥田勘口」「明治十七年建口」とあるが、その他は不明である。

7 水難供養塔

公会堂北側の墓地には、明治10年に建てられた天竜川水難者の供養塔がある。上に石仏が安置されたこの石塔は安政5年(1858)以降の水難者30名の戒名と松島吉平(十湖)の碑文が刻まれ、その傍らにも明治15年に建てられた石塔に7名の水難者の戒名が列記してある。いずれも松島吉平が建てたものである。

この水難者供養塔の左手に「西国三十三所順禮観音」「同行三拾七人」「元禄十二己卯年二月」(1699)と刻まれた古い石仏がある。



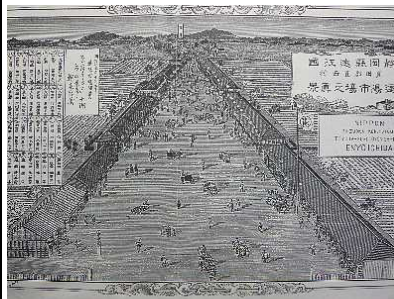
8 道標

恒武町六所神社の前に道標がある。正面の上部に地藏が彫られ、「右 中善地わたし舟 かつい斎 左 笠井二俣 道」、左面に「右 市野安間道」右面に「明治十四年己五月辰年 二歳男設立」と刻まれている。元は道の東側に建てられていた。渡しは明治16年に豊田橋架橋により途絶えたが、明治22年橋の流失により、再び渡しは戦前まで続けられた。

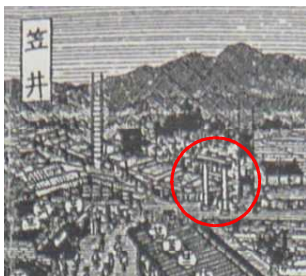


9 遠陽市場跡

江戸時代より笠井村では「笠井市」が開かれ、遠江国における流通経済の拠点であったが、出店商人の増加に伴い、明治23年に豊西村恒武に新しい市場を開設した。浜松や各地の商人により合計40の店舗が並び、賑わった。明治32年には笠井街道が市場の中を通ったが、鉄道の開通や物産流通の変化などにより、賑わいは大正の時代と共に衰えていった。



「静岡県明治銅版画風景集」(羽衣出版)



半僧坊道はこの交差点を右折し、笠井の町並みに入る。遠陽市場の銅版画を見ると、この角の手前に半僧坊鳥居が描かれている。北の養門寺には、鳥居記念碑(明治32年)

と、この角に建てられていた半僧坊の道標(明治17年)がある。

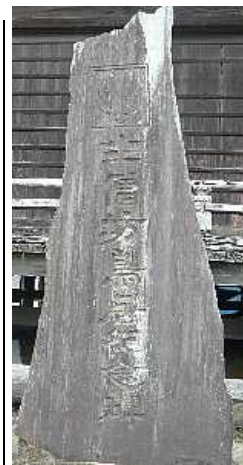


蔵店 こうじや

10 町屋と店蔵

笠井の町屋は南北の道を挟んで西側と東側の二列に連なり、奥行き長い細長い町屋となっていた。度々の大火により、石造り・レンガ造りの建物や土蔵造りの店蔵も見られた。本町の蔵店「こうじや」は明治20年代の建築で笠井街道で最古という。大正の初め、みそ・こうじを作って売り始めた。しかし、最近取り壊されてしまった。また、中町の町屋造りの「鍋屋呉服店」は江戸時代終わり頃の創業で、当時は金物などを扱っていた。その他街道沿いには「あぶらや」「おびや」「かまどや」「あまざけや」などの昔の屋号が残っているが、最近では町屋の建物が少なくなってしまった。

と、この角に建てられていた半僧坊の道標(明治17年)がある。



11 道標と鳥居記念碑

安国山養門寺境内に、大きな道標と鳥居記念碑がある。道標は表に「右 奥山半僧坊 五里三十二丁四十六間」、裏に「明治十七年六月建之」「石寄附 豊田郡掛下村 横井伊三郎(他3名)世話人 村田新平(他5名)」と刻まれている。もとは本町(下組)の南端の角にあった。



鳥居改築を記念する鳥居記念碑は表に「半僧坊鳥居記念碑」、裏に「明治卅二年五月建之」ほか寄附人と世話人の名を列記している。

12 秋葉山常夜灯



中町の街道から西に入ったもと薬師堂の前にある常夜灯である。「秋葉山常夜燈」「中町講中」「御広前」「享和四甲子正月吉日(1804)」。石工は三河国岡崎十王町今井佐兵衛である。元は中町の街道沿いにあった。また、笠井町春日神社に、天保5年(1834)の秋葉山常夜灯があり、もとは本町(下組)南端の木戸付近に建てられていた。

13 笠井観音



観光山福来寺の笠井観音(聖観音菩薩像の木造立像)が、笠井の里に現れたのは大同元年(806)。匳玉川が洪水になった後、川瀬で光を発していたものが発見された。井戸水で清め、笠をかぶせて、笠井の里の真ん中の大樹の下に安置してお祀りをしたという。願い事をよく叶えてくれる笠井の笠冠り観音様と呼ばれて、参詣の人を集めてきたと語り伝えられている。

正月十日は、観音様の縁日と笠井市の初市の日で「だるま市・十日市」と呼ばれ、賑わう。約120年前からだるまが売り出された。観音様で左目に墨をいれ、祈禱してもらって持ち帰るのが習わしとなっている。

福来寺は、17世紀の初期、寛永のころの創立と伝えられる。もともと笠井観音を守る寺として建立された。

(P4「笠井市場について」参照)

○笠井市場について

「笠井市」は、湖北の「金指市」、北遠の「二俣市」と共に、江戸時代遠江における流通経済の拠点として大きな役割を果たした。

笠井村は皆畑の村で、収穫量が少なく、年貢は金納で負担が重かった。そのため村人は農作物や手工業品などを売ったり、古着などを買い出してきて市で売ったりして換金した。また、近郷のものたちもとれた産物などを売ったり交換したりした。さらに城下の商人たちが表店を借り受けて商売をしたので、その貸し賃を得た。特に塩町の専売である塩、肴町の専売である海産物を求めて市の日には多くの人が集まり、笠井市を繁栄させたという。

市は、朔日・五日・十日・十五日・二十日・二十五日の六斎市で、上組（上町）・中組（中町）・下組（本町）の三組で交互に月2回ずつ開かれ、それぞれ上市・中市・下市と呼ばれた。

幕末から明治の初期には、新たな技術導入により遠州綿業・生糸業の基礎がつくられ、笠井市場は、繊維製品の取引が大きなウエイトを占めるようになった。明治23年には遠陽市場も開設されたが、東海道本線の開通や経済交通運輸など時代の変革とともに大正時代には衰退していった。

今では1月10日の市神様の祭典や笠井観音（福来寺）の「だるま市・十日市」が昔をしのぶよすがとなっている。



16 半僧坊町石

笠井観音（福来寺）の裏の西ヶ崎に向かう細道に町石が建てられている。正面に「五里十五丁」、左面に「長上郡上村 鈴木和三郎 鈴木勝馬」、右面に「明治十八年四月□□」と刻まれている。この道は小松に向かう半僧坊道の大伝寺前に入る近道にもなっている。



17 山下左次兵衛家の墓（法永寺）

山下家は、笠井村の代々庄屋を務めた家柄で、浜松藩の古独礼庄屋4家（鈴木家・岡部家・高林家・山下家）の一つ。独礼庄屋は、藩主に対して単独で拝謁できる格式を持ち、4家はその惣代である。参道入り口左手にある宝篋印塔の一基は「法誉道光居士」「為法誉道光禅定門」「寛永六巳二月十日」（1629）、隣の一基は「窓誉休清大姉」「為窓誉休清禅定尼」「寛永十一戌十一月十二日」（1634）と刻む。

法永寺は、紫・赤・白の三色藤が有名で、市保存樹木に指定されている。

18 笠井城跡と御殿山稲荷

御殿山は、笠井氏が築いた笠井千秋城の跡と言われる。その城中鎮守として稲荷大神が祀られていた。定明寺の開基である笠井定明の子、高利（満秀）が武田信玄と勝頼に仕え、長篠の戦いで戦死した後、社も荒廃し忘れ去られていた。明治29年に尾州の画工司馬老泉が来遊し、稲荷再興に尽くした。参道入り口の「笠井城趾」の碑は明治33年老泉の筆で、裏面に「其昔（そのかみ）の春かへり来て御殿山 老泉」の句が刻まれている。稲荷の前には「老泉翁筆塚」や燕石、三書、篤胤の句碑が建つ。



句が刻まれている。稲荷の前には「老泉翁筆塚」や燕石、三書、篤胤の句碑が建つ。

14 十湖俳句の里（源長院）

曹洞宗源長院は松島十湖の菩提寺である。長屋門造りの山門がある。十湖は、嘉永2年（1849）豊田郡中善地村（浜松市豊西町）に生まれた。幼い頃、源長院住職西尾恵全に読み書きを学ぶ。15歳で榎木夷白に俳諧を学び、17歳で宗匠となり名を知られた。また、県会議員、引佐亀玉郡長など地方政治家として活躍した。



俳句の里には、十湖の句「世の中に箒あてばやすすはらい」「浜松は出世城なり初松魚」の他、門人知友の句が並んでいる。

15 半僧坊道標跡

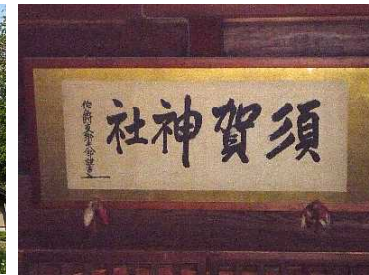
笠井上交差点にかつて道標2基があったが、法永寺に移され、さらに豊西町の「十湖百句塚」に移されている。一つは「左半僧坊道」「明治十五年八月建之」、もう一つは「直秋葉山 左平口 気賀金指道」と刻まれている。ここを左折すると、小松から祝田、金指を通り半僧坊に向かう道筋となる。





21 東郷元帥の扁額 (須賀神社)

須賀神社の社殿が焼失し、大正11年に再建した。新しい社殿にふさわしいものをと、内山俵治氏が東郷氷糖株式会社社長と協議した結果、社長が東郷元帥にお願いして「須賀神社」の直筆を拝受し、奉納したと伝えられる。



東郷元帥は伯爵・元帥・海軍大将の東郷平八郎であり、日露戦争(1904～1905)当時は連合艦隊司令長官であった。

22 万蔵川の雨乞い

須賀神社の東を流れる川は、万蔵川という。須賀神社の社僧に万蔵庵という者がおり、この名に因んだものといわれている。その川にある天王淵という淵には大蛇が住んでいたといわれていた。ここの大蛇は雨乞いに靈験があり、村人が須賀神社に祈祷し、天王淵の水を汲んで拝むと雨が降ると言われていた。また、村の男衆が自分の禪を洗うと不意に雨が降ったともいわれ、それ以来雨乞いには「雨をください」と男州の禪を洗うようになったという。



23 徳本上人の坐像

中郡町橋爪東郷堂のお堂に高さ約59cmの徳本上人の坐像がある。(現在は仮の物置小屋に安置)

昔お堂の近くの先祖が病床に臥していた。ある夜夢枕に石仏が現れて、竹藪から出して祀ってくれというので、近所の人たちと捜し出し、現在地に祀ったところ病は快復した。

頭に立帽子(たてもうす)という帽子をしている珍しい石仏である。台座の正面に「名蓮社 號譽上人彌阿弥陀佛徳本行者 文政元年寅十月六日」(1818)、側面に「文政八年酉九月日 橋爪本村中」と刻まれる。徳本上人は浄土宗の高僧で、ひたすら「南無阿弥陀仏」を唱えて日本各地を行脚し、庶民の苦難を救った。念仏中興の祖と言われている。積志町の西伝寺境内には、徳本上人の念仏碑がある。

集落を抜け、広がる水田の中の道を進み、浜北馬郡線を横断し西に向かう。

19 権蔵原

浜北馬郡線を横断して、もう一本北側の道に並ぶ住宅の裏あたりは、以前は「権蔵原」(ごんじょばら・ごんじょやま)と呼ばれる松林が続いていた。一人で歩くのは物騒な感じの場所であった。地名の由来として伝説が残っている。

「信州の松本家中鈴木権太夫は癩病にかかり、妻さよと共に廻国に出て10年、笠井新田の持当院に逗留した。妻が臨月となり同院で男子を出産し「権蔵」と名付けた。その後もまた一男を出生した。そのことを知らされた信州の兄たちが駆けつけて対面を喜び、金子十両を同院に納め病氣平癒の祈祷をした。また三七廿一日護摩修行をした結果、ついに病氣が平癒した。その後夫婦は長生きし亡くなった。」地名はこの権蔵に関わって付けられたのではないかという。



20 半僧坊町石跡

若草団地南端交差点に、かつて町石が建てられていた。土地改良時に寺島の袴田三男氏宅の庭に移されている。半分下部が折れ失われている。正面に「五里十□□」「左半僧坊 右□□」、右面に「明治十八年三月□□」と刻まれ、道標を兼ねている。左面にも文字があるが判読不明。

団地内の半僧坊道は消滅している。